

持続可能な地域社会を形成するための地誌学習

社会科専修 川瀬久美子

1. 授業の概要

現代社会を理解し、地域社会を形成していくためには、その場所毎に固有の地域性について理解しておく必要がある。本授業の目的は、統計や地図など客観的な資料に基づいて地域性を分析する能力を身につけることである。

授業は以下のように進めた。日本を北海道、東北、関東（首都圏）、関東（周辺部）、北陸、東海、近畿、四国・中国、九州、南西諸島に地域区分し、各地域の自然地理・人文地理を説明する地図や統計を資料（A3 サイズ 1 枚）として配布し、それを読み取りながら地域的特色を 3 分で説明する準備を時間外学習として課した（「3 分プレゼン」と呼称）。授業の序盤では、二人ずつペアを組み、3 分の説明を交互に行う。その後、教員の指名で 1～2 名がクラス全体で説明する（ここまでに 15 分程度）。

その後、事前に担当を決められた受講生が地域の概要と一つのトピックについて報告を行う。トピックは当該地域に特徴的な事象（東北：漁業、九州：火山、等）を教員が事前に指示しているが、担当者の判断で変更可能とした。パワーポイントなどスライドの使用は認めるが、基本的に説明に使用する地図・グラフなどは配布資料として用意させた。また、補足資料としてトピックに関連する 5 分以内のネット動画と新聞記事を紹介するように課した（以上の説明・動画視聴などで 20 分程度）。その後、報告に関する質疑応答の時間を設け、最後に教員からの補足説明を行った。

受講生は 11 名で、学期末に授業に関する無記名のアンケート調査を行い、8 名から回答を得た。

2. アンケート結果

授業の活動内容について、「とても有意義な活動・学習だった」「まあまあ有意義な活動・学習だった」「どちらでもない」「あまり有意義な活動・学習ではなかった」「まったく

有意義な活動・学習ではなかった」の 5 つから選択させた。

3 分プレゼンについては、「とても有意義」3 名、「まあまあ有意義」5 名の回答が得られた。自分自身が担当した地域の報告については、「とても有意義」3 名、「まあまあ有意義」5 名の回答が得られた。他の受講生の担当した地域の報告については、「とても有意義」5 名、「まあまあ有意義」3 名の回答が得られた。動画の視聴については、「とても有意義」5 名、「まあまあ有意義」3 名の回答が得られた。新聞記事の紹介については、「とても有意義」1 名、「まあまあ有意義」6 名の回答が得られた（無回答 1 名）。

地域特性や地域の課題の理解について、「とても理解が深まった」「まあまあ理解が深まった」「どちらでもない」「あまり理解は深まらなかった」「まったく理解は深まらなかった」の 5 つから選択させた。

各地方・地域の自然や暮らしの地域性（地域的特徴）については、「とても理解が深まった」4 名「まあまあ理解が深まった」3 名「どちらでもない」1 名の回答が得られた。各地方・地域の抱える社会的課題については、「とても理解が深まった」3 名「まあまあ理解が深まった」5 名の回答が得られた。

地図や統計を用いて事象を理解したり説明したりする能力について、「能力を身につけたり、さらに伸ばしたりことができた」「いくらか能力を身につけたり、さらに伸ばしたりことができた」「どちらとも言えない」「ほとんど能力を身につけたり、伸ばしたりことはできなかった」「まったく能力を身につけたり、伸ばしたりことはできなかった」の 5 つから選択させた。「能力を身につけたり、さらに伸ばしたりことができた」3 名、「いくらか能力を身につけたり、さらに伸ばしたりことができた」2 名、「どちらとも言えない」3 名の回答が得られた。

それぞれの設問には自由記述欄を設けている。以下、主なものを転載する。3 分プレゼンについては、「予習した上で授業に臨め

て理解が深まった」「担当者だけでなく、自分も調べるので印象に残りやすい」という記述があった。動画視聴については、「短時間に要点がまとまっているのでわかりやすい」「いい動画をみんな選んでいた」という記述があった。新聞記事の紹介については、「これが一番難しかったかも」「なかなか見つからなかった」「新聞記事を読むきっかけになる」という記述があった。地図や統計を用いて事象を理解したり説明したりする能力については、「地図や統計を読み取る機会になった」という記述があった一方、「グラフの読み取りは難しい」「もっと地図や統計をつかったらよかった」「新しいデータをまとめる能力が欲しい」という記述があった。

以上のように、授業の進め方や内容については、全般的に評価が高かった。特に、3分プレゼンは予習として機能し、それぞれの受講生が担当者の報告を聞いて理解する上での助けにもなった上、自分が調べてきた内容を質疑応答の時間に発言するなど、受講生自身とクラス全体の授業の充実につながった。また、動画視聴で受講生が取り上げたものは民間放送やNHKの報道番組の一部が多く、その地域の景観や社会的課題の当事者の肉声に接することで、学習内容をより現実的なものとして印象付ける効果があったと考えられる。

この一方で、地図や統計を用いる能力の獲得・伸張については「どちらでもない」が3名と、評価は高くなかった。実際に、事前配布したグラフや表を読み間違えていたり、3分プレゼンで図表を使いこなせなかったりした受講生が見られた。地図や統計は地域を理解する「道具」と筆者は考えている。授業の補足説明では、教員自身が配布資料の地図や統計を示して「道具」の使い方を教示してきたつもりだが、単純に見本を示して「このように道具を使いなさい」というだけでは、地図や統計の読み取り能力の育成は難しいのかもしれない。あるいは、育成に成功していても受講生自身の実感が乏しい可能性もある。

地図や統計の読み取り能力の育成のために、毎回、ひとつの地図あるいは統計（表・グラフ）を全員で丁寧に読み取る作業を取り入れることを検討したい。その過程で、そもそも「地図や統計を読み取る能力」とは何を

指すのか（何をもってこの能力がある、または育成できたと言えるのか。また、この能力があることが、どのように地理的理解につながるのか、等）、今一度整理していきたい。

3. 地域社会を核とした教育と研究のつながり

前述のように、各地方・地域の抱える社会的課題については、「とても理解が深まった」3名「まあまあ理解が深まった」5名の回答が得られた。自由記述では、「問題を知ることによって対策を考えるきっかけになった」「地域によって特色があり課題も様々であることを知れて良かった」という記述があった。

本授業では地域社会を核とした研究の成果として、筆者自身の研究成果ではなく、朝倉書店発行『日本の地誌』シリーズから図表をピックアップして、3分プレゼンの資料とした。地域社会を核とした学術研究の対象地域は往々にして市町村以下のスケールと狭く、地方別に地域を理解する本授業の目的に合致する研究は少ない。筆者自身の学術研究についても対象地域のスケールは小さい。

『日本の地誌』シリーズは地理学研究者が地方を概観して把握することができるような地図・グラフを作成して掲載していることから、本授業の資料としては適切だった。

なお、『日本の地誌』シリーズはそれぞれの地方別分冊として、2005～2012年に発行されており、古いものでは10年以上前のデータとなっている。地域特性は歴史事象の積み重ねであり、地域の概要把握をする上では、若干のデータの古さは差しつかえないと筆者は考えている。しかし、地域社会の今日的課題を考えるには、インターネット上の動画や最近の新聞記事のほうが情報が新しく有効である。持続可能な地域社会を形成するためには、常日頃から様々な情報から地域の現状や課題について情報を得ようとする姿勢が大切であり、本授業ではいくらかそのきっかけをつくることのできたと考える。

本授業で受講生が獲得した地方スケールの地理的知識は、より小さなスケールの地理的事象を理解したり分析したりする上でのバックグラウンドとして必要なものである。地域社会を核とした教育と研究のつながりとしては、本授業を発展させた教育活動（卒業論文作成）などで可能であろう。